

---

# オワタ。WWW

夢幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オワタ。www

### 【コード】

N9832H

### 【作者名】

夢幻

### 【あらすじ】

未完のまま完結しました。www

もう活動しておりませんので、

こちら(<http://ncode.syosetu.com/n1621j/>)を

これから更新していきますので、読んでいただくと、幸いです。

プロローグ1-1 RTP界(前書き)

何かgdgdですが、これからよろしくお願いします。

2009/10/4 改訂

小説を三人称に変更。

理由は一人称で行き詰まったから。WWW

## プロローグ1-1 RTP界

「王様、私をお呼びになるとは、まさかまた魔王が暴れ出したとか？」

と、アレックスは聞いた。

アレックスとはは2年前世界を支配しようとしていた魔王を止め、さらにそれを影で操っていた者を倒した勇者、アレクサンダー・レクス・クルセイダー・スミスの事で、略してアレックスである。

装備は鉄で造られている剣を手に持ち、更に青色の布で作られた服を着ている。

「うむ……。魔王ではないのだが、下手をすると、魔王よりも強力な奴かも知れぬ。」

と、王様が返答を寄越した。

王様とは、この国、ユニバーヌ国を治めている王である。

赤色のマントに身を包み、王冠を被っている姿はとても威厳に満ちあふれている。

「おいおい……。魔王を倒すのでさえ、俺たちがボロボロになつてやっとだつただぞ。」

こうなったら、俺たち何かより、キャロル達に頼めばいいじゃないですか。」



アレックスは聞いてみた。

「そうなのだ。何でも魔王が言うにはこの世界はRTP界と呼ばれる唯一の世界でしかないらしく、他の世界を発見した、とか言っておったな……。」

そして魔王はその世界に転移を試みた。だが、最初の内から違う世界に飛ぶのは  
リスクが多すぎる。なので、近場にある近辺の町に転移を始めたのじゃ。

そうすると、転移の時に発動する莫大なエネルギーも魔王の体と同時に

転移してしまい、町が破壊されてしまった、と言う訳じゃ。」

王様がかなりの早口で、さらに凄まじく難しい、そしてとても長いことを言った。

「理解しました。」

アレックスはとても頭が良かった。

「お前一回でよく分かったな……。」

ブライアンは意味が分からなかった様だ。

こいつは馬鹿だからな……等と、アレックスが思っていると、

「とにかく……。強大な力を持つ何かが迫っている……。  
そう言うことですね。」

ブライアンが言った。

「そう言うことだ。」

「成る程……。だったら、早急に手を打たねばなりませんね。」

アレックスが王様に言った。

「そうなのだ。それで、お前達にやって欲しい事は……。」

そこまで言った時、玉座の間をぶち破り何者かが入ってきた。

「曲者だ！」

アレックスが叫ぶ。

そうすると、この城一の実力者であるライト兄弟が現れた。

ライト兄弟は兄がライト、弟がレフトと言う名前の兄弟であり、使っている武器は槍である。

更に青色の鎧で身を包んでいる。

「何者でござますか、アレックス殿！」

ライトが叫ぶ。

「それはまだ分からない！だが、この玉座の間の入り口には強大な魔法でバリアが張ってあった筈……。」

それをぶち破る程だ。まさか、魔王か!？」

「それは違うな。」

玉座の間の入り口を壊した事により起きた白煙の中から声がした。

「この声は……。ダーエロか！」

「その通りだ。我が戦友アレックス、ブライアンよ。」

どつやら、気配で察知している様だ。

未だに煙が舞い上がっていてこちらからでは輪郭しか見えない。

「さあて、俺が用があるのはお前等じゃない。

そこに座っている王に用があるんだ。」

王様に用だ？何があると言うんだ、とアレックスは思った。

「王、今すぐこの国の全ての権利を魔王様に存続させる。」

な！？、とアレックスが驚く。

「ダーエロ！お前は何を言ってるんだよ！一体、何の目的があつて、そんな事言ってるんだよ！魔王は一体何をしようってんだ！」

俺はダーエロに聞いた。

「お前は何も分かってない。あのお方が何を考え、何のためにこんな事を行っているのかも。

お前には分かるまい。」



「だったら、力尽くで聞き出すまでだ！」

アレックスは剣を手にダーエロに突っ込んだ。

プロローグ1-2 魔王軍の強さ(前書き)

引っ張り過ぎですね。 W W W

2009/10/4 改訂

小説を三人称に変更。

理由は一人称で行き詰まったから。 W W W

## プロローグ1-2 魔王軍の強さ

「うおおおー!!」

アレックスが鉄の剣片手にダーエロの輪郭がある所に向かって突っ込んでいく。

「全く、昔の方がもう少し冷静だったんだがな。アレックス。」

ダーエロが言った。

ダーエロは魔王軍四天王の一人であり、更にその中でも最強の実力を誇っている。

一部の噂では、魔王よりも強いらしい。

ちなみにダーエロ、と言うのは唯の仇名である。

此奴は魔王軍でありながら、勇者側、要するにあの戦争の時の俺達の味方であったヘレンと言うエルフのストーカーをしていたのだ。

ダーエロは本当はダークエルフと言うそれらしい名前があったのだがストーカーをしている事がばれてしまい、他の四天王から

ダークエルフエロ ダークエロ ダーエロ

とまあこういう風に名前をつけられてしまった訳である。

容姿と言えば、やっている事からは想像できない程のかなりの美形である。

耳はエルフ特有の尖りを見せている。

黒いジャケットの様な物を着ていて、安そうなズボンを履いている。

「ダーエロ！覚悟しろ！！」

アレックスがダーエロの輪郭に剣を突き刺した。

だが……。

「まさか俺の残像に剣を突き刺すとは落ちぶれたもんだな、勇者さんよお！」

背後から強烈な蹴りを受け俺はぶっ飛び、玉座の間の壁に罅が入る勢いで激突した。

「ぐあ……。」

うが。肋の二、三本イっちゃったとはこの事だろう。

動けない程痛い。

アレックスは驚いた。

昔のダーエロには考えられない程の強さだ。

此奴も鍛練を重ねたって事か。

って、納得してる場合じゃない。

此処はブライアンに何とかしてもらわなければ……。

アレックスがそんな事を考えているとブライアンは彼の思った通りの行動をしてくれた。

王様の前に立ち塞がり、守ろうとしてくれたのだ。

王様さえ殺されなけりゃ大丈夫だ。

此奴等の目的は王様らしいしな。

と、アレックスは安心していたのだが……。

「はあああ！」

ブライアンは剣をダーエロに振り下ろした。

だが、ダーエロはそれをいとも簡単にかわし、彼と同じようにブライアンに蹴りを入れた。

ブライアンも吹っ飛んだ。

こうなると役立つのは、ライト兄弟だけだ。

「兄者！連携魔法です！」

レフトが叫ぶ。

「了解した！行くぞ！ファイア?!！」

ライトの掌から火の玉がダーエロに向かって飛んでいく。

「ファイア?!」

レフトも同じようにダーエロに向かって放つ。

二つの火の玉は途中で激突し、一つの大きな火の玉になったよ

「これが連携魔法だ！」

よくやるもんだ。さすが、双子とアレックスは思った。

ファイア?+ファイア?#ファイア?、こういう事らしい。

「フフフ……。この俺に魔法を使う事自体が間違っているんだよ  
!」

そう言うとダーエロは手に持っていた剣を火の玉にぶつけた。

その瞬間火の玉は剣に吸収されてしまった。

「ぐ……。ダーエロ、その剣……。アブソープソードか……。  
!?!」

アレックスが痛みを抑えながらダーエロに問いかけた。

「さすがよく知っているなアレックス。そうさ、この剣こそが

ダークエルフの一族に伝わる秘宝中の秘宝、アブソープソードさ

「!!」

アブソープソード。

その剣の事を説明するにはエルフの伝説を語らなければならない。

元々エルフとダークエルフは一つだった。

その中でも悪しき考えを持つヴァンダルギオンと呼ばれるエルフが

独立し、ダークエルフを創り出したらしい。

そして、独立の時にその証としてエルフの長であったイドを殺し、その秘宝であったアブソープソードを盗んだ。

だが、アブソープソードはダークエルフの長にしか渡されない筈であった。

「お前はダークエルフの長の血縁にあたる者だったのか!」

「その通りだ。俺の本当の名前は、ヴァンディ。」

「ヴァンダルギオンの血を引く者だ!!!」

これは拙い事である。

ダークエルフの長というのは何でもありとあらゆる

魔法を使いこなし、全ての民に認められなければならないらしい。

それにアブソープソードの本当の効果は魔法を吸収するだけではない。

「この剣の本当の怖さを教えてやるう……！  
喰らうが良い！魔法剣発動……！！」

そうダーエロが言うと刀身から炎が巻き上がった。

「この剣は、吸収した魔法を発動し剣にその効果を  
映し出す事が出来る……。死ねえ！」

どうやら、ライト兄弟もここまで凄まじいとは思っても見なかったらしい。

万事休すである。

その時、奇跡は起こった。

ダーエロが剣でライトを斬りつけようとした瞬間、  
ダーエロとライトの間の空間の凄まじい爆発と共に  
そこに現れたのは炎髪灼眼の少女とジェーンだった。



プロローグ 1 - 3 再邂逅(前書き)

パクリが好きなんですよ、僕は。 W W W

## プロローグ1-3 再邂逅

「ジエーン……。此処何処なの？」

炎髪灼眼の少女が言った。

う……。この娘、俺のツボだな。

つて、何俺は卑猥な妄想をしているのだとアレックスが思っている  
と、

「そんなの、俺は記憶喪失なんだから覚えている訳無いだろ……。

」

どうやら、この娘とジエーンは知り合いの様だ。

それにしても記憶喪失とは……。

「ジ……ジエーン！俺を覚えてないのか？」

アレックスはジエーンに聞いてみた。

「え？えつと……。誰、だっけ？」

おいおい……。

つと、それよりも。

「丁度良い所に来た！今、俺はお前の宿命のライバルと戦っている

んだ！

手助けしてくれないか？」

しかし、よく見るとジェーンの髪の色が昔と大幅に違う事が分かった。

昔は赤じゃなかっただろうか、今では青色である。

あ、そう言えば此奴はふとした切欠から髪の色が変化するとか言うご都合主義な奴だったか。

「宿命のライバル？このエルフが？」

ジェーンは驚きながら言った。

そりゃ、記憶喪失だから覚えてないだろうな。

「そう言う事だ。すまないが、此奴と戦ってくれないか？俺達じゃ、とても太刀打ちできないんだ。」

アレックスがジェーンに頼み込んだ。

「それだけ、頼まれちゃなあ……。

しょうがないな、戦うか。」

どうやらジェーンは承認してくれた様だった。

「あ、でもその代わり、この娘も戦わせて良いかな？」

ジェーンが聞いてきた。

「別に良いけど・・・戦えるのか？」

アレックスが問う。

「下手したら、俺よりも強いぜ、この娘。」

と、ジエーンが言うと、

「この娘じゃなくて、シヤナ。いい加減覚えてよね。」

「おっと、忘れる所だった。」

彼奴に属性を持つ攻撃は通用しない。

あの剣が吸収してしまうんだ。」

これはある意味一番大事なことだった。

「大丈夫、大丈夫。さあて、早速行くぜ！」

ジエーンは自分の身の丈程もある大剣を背に担いでいたのだが、突如その剣を引き抜き、両手で持ちダーエロに向かって突っ込んでいった。

ちなみに、この剣はバスタードソードと言い、170?もある大剣である。

その長さ故にかなり重く、両手でないと扱えないのであまり好きこのんで使うものは居なかった。

改良版として、片手で扱える重さまで減った

バスタードソード？も存在するが、  
ジェーンは何故か？を好んでいた。

「今は突っ込むのが流行っているのかい？」

と、ダーエロ ヴァンディと言うべきか が嫌みを言いつつ、  
身を翻しジェーンの突進をかわす。

このままでは、アレックスの二の舞である。

先ほどまでと同じく、やはりヴァンディは  
蹴りを入れようと足を伸ばした。

ここまでは同じであった。

何とジェーンはあの大剣を地面に突き刺し、  
それを起点として一回転し、またヴァンディの所へ走っていった。

今度は剣を前に突き出し突っ込んでいくのではなく、  
ちゃんと脇に添えて走っている。

どうやらこれはヴァンディにも想定外だった様で、  
思わず慌てふためきバランスを崩してしまった。

「今だ！」

ジェーンが叫ぶ。

すると、先ほどのシャナと呼ばれた少女が、  
ヴァンディにジェーンとは反対側の位置から跳んで近づく。

さらに、ヴァンディの頭の上から剣を振り下ろした。

「くそっ！」

だが、そこはやはり魔王軍四天王である。

剣が頭に接触する直前にバランスを取り戻し、あのアブソープソードを頭の上に振り翳す。

ジャキーン！

剣と剣がぶつかり合う。

だが、そうこうしている内にジエーンがヴァンディにかなり接近していた。

「やはり、こつ言つことか！」

どうやら、ヴァンディには既に作戦が読めていた様だった。

ジエーンが剣を横から薙ぎ払う。

その時、ヴァンディは地面を足で思い切り蹴飛ばし宙に浮かび上がり、その勢いそのままシャナを蹴飛ばした。

「キヤアアア！」

そのままシャナは壁に激突した。

やはり強いな、とアレックスは思う。

何か劇的な変化が奴の体に起きているはずだ。

それさえ分かれば……。

ヴァンディはいつの間にか着地し、  
再びジェーンと対峙していた。

「成る程ねえ……。俺のライバル、強すぎだな。」

ジェーンが言う。

「お前が弱くなっているだけだ。

昔のお前はこんなもんじゃなかったぞ。

記憶喪失とか言っていたが、落ちぶれたもんだな。」

「言い返す言葉が見当たらないね。」

ジェーンが暗い声で言った。

結局万事休すじゃないか。

どうすんだ、とアレックスが思っていたときであった。

「もうやめておけ、ヴァンディよ。」

聞き慣れた暗いトーンの声、この声は……!

「魔王!!!!!!」

ジェーン、シャナ、ヴァンディを除く一同が一斉に叫ぶ。

「魔王様、あと少しなのです。どうか、私に止めを刺させて下さいませんか？」

ヴァンディが頼み込む。

「お前のその力、忘れた訳ではなからう。

やめておけ、お前の身の為に言っておるのだぞ。」

魔王が言った。

お前の身の為？一体、どういうことだ、とアレックスは思った。

この凄まじい力が一体ヴァンディの体にどういう影響を及ぼすのだ？

「分かりました、魔王様……。

お前達、命拾いしたな。」

まさにその通りである。

「また会おう。戦友、アレックス、いや“To#ti\$no%ti  
\$mo&amp;#ti\$to#ti\$ka·rA)”と  
呼んだ方が良いのかな？」

何だって？どうやらエルフ語の様である。

んなもん分かるか。



「そして我がライバル、ジェーンよ……。」

そう言うと、魔王とヴァンディの体は一瞬で、  
何処かに消え去った。

やっと終わった、と思ったとき、既にアレックスの意識はなく  
深い眠りについていた。

## プロローグ 1 - 3 再邂逅（後書き）

ちなみに、あの名前は実はちゃんとした暗号になってます。

それにしても今回、無駄に長くなつたな・・・。

プロローグだけでえらい長くなりそうなので

この小説のタイトルの最後に

“プロローグ”と付け加え

本編とは別にする予定でいます。

ブローグ1-4 モンスターハンター（前書き）

急展開。 W W W

2009/10/15 増訂

ヴァンデイが空気になっていたので、  
文章の量を増やしました。

2009/11/01 改訂

流離いの一人称を“俺”から“僕”に変更。

## プロローグ1-4 モンスターハンター

プロローグ1-4 モンスターハンター

あの戦いから、三日が経った。

此処は、王城の一室である。

此処には、あの戦いの時の一部を除くメンバーが集結していた。

居ない人と言ってもライト兄弟と王様だけであつたが。

「みんな、俺から相談があるんだけど……。」

こう切り出したのは、アレックスであつた。

「どうせ、ダー……じゃないヴァンディ関係のことたる？」

ブライアンが言った。

成る程、さすがだなとアレックスは思った。

「俺と付き合いが長いだけあるな、ブライアン。」

アレックスがそう言うと、今度はシャナが、

「大方、自分の実力の無さに自信喪失。

旅に出るとか言い出すんでしょ？」

アレックスは、

「お前は、未来予知の能力でも持つてるのか？」

こう言っただった。

「あたし達、フレイムヘイズにそんな能力無いわよ。」

シヤナが平然と答えた。

「フレイムヘイズ？」

思わず一同が聞き返す。

「それは我が輩が説明してやるわ。」

等と、いきなりシヤナが付けていたペンダントから声が出たので思わず後ろに引っ繰り返りそうになった一同であった。

何でも聞くとこの声の主はアラストールと呼ばれる

紅世くせの王おうらしく、

このペンダントはコキュートスと言い、アラストールの意志を表出しているそうだ。

「なあなあ、紅世の王って何？」

ブライアンが聞いた。

「それはね……。」

シヤナが説明を始めた。

纏めて説明しよう。

まず、紅世くせと言うのはこの世界とは反対の世界、  
紅くれないの世界せかいから来た者のことで、  
人間を喰うそうだ。

そして、そいつらを殲滅するのがフレイムヘイズ。

どうやら、こつこつ事らしかつた。

ついでに言うと、今シヤナは黒髪であり  
戦闘の時だけ炎のような髪の色になるそうだ。

「じゃあ、質問があるんだけど。

ジエーンとシヤナって一体何処から来たんだ？」

アレックスが聞いた。

「あたし達は、物質界から来たのよ。」

何だって？アレックスは思った。

「物質界って・・・何処？」

「この世界じゃない世界。」

簡単に言えば、この世に存在する世界は一つじゃない。  
無数に存在するってこつた。」

ジエーンが説明した。

その話は俄には信じられなかった。

いや、誰だって信じなかっただろう。

「嘘……だろ？」

アレックスは思わず言ってしまった。

信じられないだろ？普通。

「もし、信じたとして……。どうやって、この世界に来たんだよ。その……物質界から。」

アレックスが聞いた。

「それはあたし達にも分からないわ。目の前に変な光のゲートが表れて潜ったらこの世界だった訳。」

シヤナが答えた。

何でも、アーサーとキャロルはそこに一緒にいたらしいのだがそのゲートを通ってこなかったそうさ。

「って、まあその話は置いておこう。どうせ、話して解決する話じゃないんだろ？」

ブライアンが言った。

「それもそうさ。本題に戻ろう。」

ジェーンが言う。

「まあシャナが言っちゃったが……。」

俺は旅に出るつもりなんだ。誰か一緒に来る奴はいるか？」

アレックスはシャナだけが拳手でもしてくれると嬉しいな、  
と黙っていて、気づいたら全員が拳手していた。

「え？みんな来るの？」

- - -  
- - -  
- - -

結局全員で旅に出たアレックス一行は特に行く宛がなかったので、  
出発前に言われたライトからの一言で北に向かっていた。

その一言は、

「最近、北の山でモンスターが目撃されているらしいです。

兵士達の情報によれば見たことのないモンスターだとか。

雷を体から発するそうなので気をつけて下さい。」

と、まあこういう事であった。

そして実際その雪山に着き、此奴のことなんだろうな、と言うモン  
スターと

対峙している一行であった。



「モンスターと言うより、化け物って言った方が良いんじゃないか？」

アレックスが思わず言った。

目の前にいたのは目、耳が無く口らしき穴が開いているだけ、更に翼まで生えていて尻尾があるかなりの大きさのただの化け物であつた。

「此奴、目がないのにどうやって敵を判断するんだ？」

ブライアンが言った。

「恐らく、臭いね。あたし達の血や肉の臭いだわ。」

シヤナが答えた。

「ギオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

その不気味な化け物が急に叫んだ為、一同は思わず体を強張らせた。

「やっぱり襲ってくる・・・よね？」

ジエーンがそんなことを言っている間にその化け物は既にアレックスに跳びながら襲いかかっていた。

「何で俺なの！？」

そんな悲痛な叫びをしながら、アレックスは横に身をかわした。

「とりやあああ！」

その際にブライアンが後ろから斬り掛かる。

ザクッ！

と、確かな手応えを感じたブライアンであったが、  
巨大な化け物にとってはそれは掠り傷程度でしか無いようであった。

「冗談だろ……。」

ブライアンが言う。

その一瞬の間に化け物が体を回転させその巨大な尻尾で  
ブライアンを叩く。<sup>はた</sup>

「うごああああ！」

ブライアンは思いつきり吹っ飛んだ。

そして雪山の壁に激突した。

この前と一緒の状況であった。

「力が半端ないな……。」

ジェーンが呟いた。

「ギヤアアア！」



今動けるのは、アレックスとシヤナだけである。

ブライアンは先ほどの激突で気絶している。

「シヤナ！お前の炎だけが頼りだ！

俺が囷になる、その隙に攻撃を叩き込め！」

そう言うと、アレックスは化け物に突撃していった。

「オオオオラアアアア！！！！！」

上に跳び剣を振り下ろす。

「ギヤアアアア！」

体から電気を発している化け物の体に剣が刺さりそうになったとき、剣が帯電してしまい、アレックスの体にまで電流が走った。

「ぐああああつああ！」

ジエーンと同じ状況である。

「アレックス！！！」

シヤナが叫ぶ。

もはや、どうしようもなかった。

「その首、貫ったあ！！！！！」

そう言いながら化け物に跳んでいった者、それは何とヴァンデイであった。

ヴァンデイは刀身から炎を舞い上がらせ、その状態で化け物を斬った。

「ギイオオオオオオオオ!!!」

やはり炎に弱いようである。

シヤナの時と同様にかなり痛がっているように見えた。

「アンタはあの時の・・・ヴァンデイだったかしら？」

シヤナが聞いた。

「ああ。俺達、魔王軍にとってもこういった化け物は邪魔だからな・・・。」

「何で化け物がアンタ達の邪魔になるのよ!」

「何故、お前にその答えを言わなければならないんだ?」

そんな言い争いをしている間に化け物は、のっそのっそ、と近づいてきていた。

「!」

二人が気づいたときにはもう遅かった。

凄まじい電気を帯びた尻尾がヴァンディを直撃する。  
動けなくなった。

シヤナは絶望し、もはや命を諦めたその時であった。

雪山の崖の上から数発のボウガンの弾が飛んできた。

その弾は燃えていた。

それが数発化け物の体に直撃し、化け物は動かなくなった。

数秒後、ボウガンを持った男が崖から飛び降り、シヤナの元に向か  
つてきた。

シヤナは思わず身構えた。

「大丈夫だ。警戒することはない。  
僕は流離いの狩獵者。流離いと呼んでくれ。」

## プロローグ1-5 邪の猛攻（前書き）

久しぶりの投稿と言うか、暇な時間を見つけた書いたので、話が噛み合っていない可能性があります。

後、くが聞く、とかが無茶苦茶多くなった。WWW

## プロローグ1-5 邪の猛攻

「さ……流離い？アンタ、何者なの？」

シヤナが思わず聞いた。

「俺は、流離いの“モンスターハンター”。

ある地域に生息するモンスターを狩ったりとか、

モンスターが生息している地域から物を採取してくるとかで、

経営していたんだが……。」

そこまで言うと、流離いは黙ってしまった。

「何があったのよ？」

シヤナが聞く。

「その地域一帯からモンスターが消え去ってしまったね。

村中大騒ぎさ。僕も原因究明を手伝っていたんだが、

疲れ果てて倒れてしまっただね。気付いたら、この世界にいた訳さ。

で、この近くで野宿して暮らしていたんだが、下の方から

物凄い音がしたんでね、行ってみたら、アンタ達が戦ってて、

で、それも戦っている相手が僕の世界に居た“フルフル”って言う

化け物だったんだ。」

流離いが一気に喋った。

どうやら、それで疲れたらしく息が上がっている。



それに、流離いの口癖“で”の様らしい。

「あたしと同じじゃない。あたしも、気付いたらこの世界にいたのよ。」

ところで、アンタ本名は？」

シヤナが答えた。

「僕は捨て子でね、本名を知らないんだ。何でも放浪していた夫婦から

この子を預かってくれ、って渡されたから“流離い”らしい。

その後、その夫婦……って言うか僕の親はまた何処かに  
行っちゃったらしいんだ……って、

早くこの人達を治療しないと死んでしまうぞ！」

それからシヤナ達は、アレックス、ブライアン、ジェーン、  
それから不本意ではあったが、見殺しにするのも何だったため、  
ヴァンディにも薬を飲ませた。

飲ませた薬は“回復薬グレート”と言い、流離いの世界では  
中々の薬だそうだ。

それから数分後、仲間である三人が目覚めたため、  
シヤナは事情を説明した。

「そうか……。結局俺達はあまり役に立てなかったな。」

アレックスが暗い声で言った。

「まあ、しょうがないじゃないか。相手は化け物だぜ？」

ブライアンが明るく言う。

「それもそうだ。」

ジェーンが賛同した。

その後、ヴァンディも目覚め、

「世話になったな。」

と一言言い、そして

「お前達にこれで借りが出来てしまった。

いつか、必ず返そう。」

そう言うと、雪山を飛び降りていった。

「いや、流離って強いんだな。」

ブライアンが言った。

「別に僕が強い訳じゃなくて、この武器が強いんじゃないかな？」

流離いが答える。

「どんな武器を使っているんだ？」

アレックスが聞く。

「僕が好きなのは“ヘヴィボウガン”って言うんだ。」

流離いが答えた。

「ボウガンと言うからには、飛び道具か。

一体どんな弾を持っているんだ？」

ジエーンが聞いた。

「僕が持っているのは、“レベル1 通常弾”。

これを主に使っているんだ。」

「レベル1？」

シャナが聞いた。

「そう。確か、レベル3まで存在していたんじゃないかな。

で、他に僕が持っているのは、さっきフルフルを倒したときに使った、

“火炎弾”。これは、名前の通り、撃つと火を放つんだ。」

流離いが言った。

「おもしれえなあ。」

ブライアンはどうやら意味がよく分かっているらしい。

「それから……。」

流離いが他の弾の紹介を始めたとき、アレックスの後ろに何者かが忍び寄ってきたのをシャナは見逃さなかった。

「アレックス、危ない！」

シヤナがそう叫ぶと、アレックスは咄嗟の判断で、前方に跳んだ。

「ほう、私の速さをかわせるのか……。」

その声が聞こえたので、アレックスは後ろを向いた。

そこに立っていたのは長い銀髪に黒い服を着た男だった。

手には、長い太刀を持っている。

「フフフ……。全く、もうちょっと強いと思っていたんだが……。」

まさか、フルフルも倒せないとはな。」

男が言った。

「あの化け物は、お前が用意したのか？」

ジェーンが聞いた。

「いや、違う。だが、まあ私が用意したと言っても過言ではないかもな。」

男が答えた。

「意味が分からん。お前は一体何者なんだ？」

ブライアンが痺れを切らして言った。

「私は、“霸王軍・將軍”の“セフィロス”だ。」

セフィロスが言った。

「霸王軍……だと……？」

アレックスが息が詰まりながら言った。

よく見ると、顔が真っ青なのであった。

ジェーンも同じ状況であった。

「霸王……。あの“世紀末の覇者”の事か？」

ジェーンが言った。

「ほう……。霸王の事を少しは知っているのか。ならば、あの逸話も知っているのであるうな。」

「あの逸話？」

何も知らない流離いが言った。

「俺が話そう。」

そうアレックスが言うと、逸話を語り始めた。

紀元前かも江戸時代かも分からないが、昔。

その時代は、それはもう戦いが絶えなくて、自然も破壊されて世界の滅亡が近づいていた。

その時に現れた者。

それが、霸王。

名前は明らかになっていない。

霸王はこの戦いを何らかの手段を用いて、終決させそれ以来、“世紀末の覇者”霸王、と呼ばれ民衆の間に伝わっていったらしい。

「ほう。そこそこ知っているんだな。」

セフィロスが微笑を浮かべながら言った。

「どう言う意味だ？」

ジーンが聞く。

「いや……。言葉の通りだよ。」

大凡おおおよその事は知っていても、いつの時代なのかとか、本名は何なのか……。その様な事までは普通の人間は知らない。

セフィロスが言った。

「で、お前は結局何をしに来たんだ？」

まさか、霸王の逸話を話すために来たのか？」

アレックスが聞いた。

「違うな。私が来た理由は一つ。お前達を……。」

そこまで言った時、シャナとジェーンはセフィロスに斬り掛かって  
いた。

「殺しに来たってか!!！」

ジェーンが叫んだ。

そして、ジェーンとシャナはお互いの剣をセフィロスに振り下ろす。

だが、セフィロスは、片手で、その長い太刀を構え、二人の剣を受  
け止める。

「あの二人の剣を片手で受け止めるだ!!！」

ブライアンが驚いて言う。

「さすがは、霸王軍……って所か。」

アレックスが言った。

いつの間にか、ジェーンとシャナは、セフィロス相手に、  
悪戦苦闘していた。

二人が素早い斬撃を繰り返すも、セフィロスの速さにはかなわず、全て攻撃を受け止められていた。

「って、そんな呆然としてる場合じゃないよ！早く援護しないと！！」

そう言うと、流離いはボウガンに、“火炎弾”を詰めた。

「用意できたか？」

アレックスが剣を構えながら聞いた。

「準備万端。僕はいつでもいけるよ。ブライアンは？」

「OK。いくぜ！！！！」

そう言うと、流離いは火炎弾をセフィロスに向かって放った。

その間に、アレックスとブライアンは、セフィロスの横に回り込む。

「先程、会ったばかりだと、言うのに……。上手いフォーメーションだな。」

そう言うと、セフィロスは、刀を構え、横に振った。

すると、ジェーンとシャナは、無数の剣筋で斬り刻まれた。

「キヤアアアアアア！！！！」



ジエーンとシヤナは地面に崩れ落ちた。

「シヤ・・・シヤナアアアアアア！！！！！！！」

アレックスが叫んだ。

その時、アレックスの中で何かが 切れた。

「うああああああああああ！！！！！！！！！！」

アレックスの右手の甲に謎の紋章が浮かび上がった。

「作戦通りだ・・・。」

セフィロスが呟いた

「作戦通りだと・・・？」

流離いが言った。

「セフィロスウウウウウウ ！！！！」

アレックスがセフィロスに突っ込んでいく。

「フフフ。それが見られただけで、良しとしよう。

それに、その力を使いこなせていない、今のお前では、俺には勝てん。」

「ウラアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

アレックスの右の掌から真っ白な球体が現れた。

大きさはテニスボールぐらいであった。

アレックスは訳も分からず叫んでいた。

「ブラストオオオオオ!!!」

その球体をセフィロスにぶつけ ようとした。

だが、セフィロスは片手で、突っ込んできたアレックスの右腕を掴み、  
体を地面に叩き付けた。

「グアアアア!!!」

「全く、もうちょっと頑張って欲しい者だ。

混沌の覇者の容れ物 と、でも言っておこうか。

フフフフ……。」

そう言うとセフィロスは、虚空に消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9832h/>

---

オワタ。www

2010年10月25日09時08分発行